

花か下かにに酔よう

李り

商しょう

隱いん

芳ほうをを尋たずねてねて覚おぼえずえず流りゅう霞かにに酔よう

樹きにに倚よりり沈ちん眠めんしてして日ひ已おとにに斜なな

客かく散さんじ酒さけ醒さむむ深しん夜やのの後のち

更さうにに紅こう燭しやくをを持じしてして残ざん花かをを賞しょうす

【作者】李商隱(八二二年〜八五六年)・晩唐の詩人。杜牧、温庭筠(おんていん)らと同時代人。字は義山。河内(現・河南省)の人。玉溪生とも号した。独自の世界を開いた。

【語釈】*花下酔…花のもとで酔う。 *花下…花の美しく咲きにおう下。||花底。 *艶めかしい意味が隠された詩である。

*尋芳…花を探し求める。 *倚…もたれる。よりかかる。よる。 *斜…かたむく。午後になって、日が西に傾いていること。

*酒醒…酒の酔いが醒める。 *紅燭…桃色のともしび。 *残花…散り残りの花。散り残って、すたれた花。

【通釈】花(自然界の花)美しい妓女を探し求めているうちに、いつの間にか流霞(||霧や雲気)仙界の酒)に酔ってしまい。

木に寄りかかって熟睡してしまい、日も西に傾いている。他の人々が帰り、酒の酔いが醒めた深夜になってから。さらにまた、あかいともしびを手に持って散り残りの花を觀賞した。